

渤海小考

森田 豊

《Summary》

**Bohai and Japan, friendship
A Treatise on Bohai**

Yutaka Morita*

This paper focuses on writings and materials related to a nation which prospered and then disappeared very quickly in the Nara Heian period, and on the people involved in dealing with this nation. Japanese culture was greatly influenced by the culture of the continent, and the Korean peninsula, which connects the continent and Japan, played an important role in this process. It is therefore essential to consider the people, writings and materials of this nation. The author focuses on those people who made a contribution to the development of natural science. This paper deals only with the introductory aspect of the study and will look further at historical aspects in the next issues. Some consideration is given to the surroundings of our university, which is near Koma village, the habitation of the descendant of Kokuri, and to Josai University's desire to establish a everlasting friendly relationship with Yan-bian medical college.

* 城西大学教授・研究員

続日本紀卷第十・天璽国押開豊桜彦天皇（聖武天皇）の項（東洋文庫・直木孝次郎他訳注，1986年，平凡社刊），神亀四年（727），九月庚寅（二十一日）の條に，「渤海郡王の使者，首領・高齊徳ら八人が出羽國に来着した。〔朝廷〕は使者を派遣して慰問し，また時節に合った服装を賜わった。」とあるのが通交に関する記載の初めである。しばらくは続日本紀からの引用を続ける。十二月丁亥（二十日）渤海郡王の使者の高齊徳ら八人が入京した。丙甲（二十九日）〔天皇は〕使者を派遣して高齊徳らに衣服と冠・はき物を賜わった。渤海郡はもとの高句麗国である。淡海朝廷（天智天皇）の七年（668）十月，唐の將軍李勣は高句麗を伐ち滅ぼした。その後この国の〔日本への〕朝貢は久しく絶えていた。ここに至って渤海郡王（大武芸）は寧遠將軍の高仁義ら二十四人をわが朝廷に派遣したが，蝦夷の地に漂着したため仁義ら十六人が殺害され，首領（渤海の身分の一つ）の高齊徳ら八人がよくやく死を免れて来朝した。というのである。その彼等がもたらしたものは，五年（728）春正月甲寅（十七日）の條にある。引用すると，天皇が中宮に出御した。〔渤海の使者〕高齊徳らが渤海王の書状と土地の産物を進めた。書状の文には〔つぎのように〕いつてあった。武芸（渤海第二代の王，大武芸のこと）申しあげます。〔両国は〕山河はところを異にし國土は遠く離れていますが，〔私は〕遙かに〔日本國〕の政教のはかりごとを聴き，たゞ心を傾けて欽仰の念を増すばかりであります。恐れながら考えてみますに，大王（日本の天皇）は，〔中国の〕朝廷より命を受けられて，日本の国に王朝の基を開かれ，代々栄光を重ね，祖先より百代にも及んでいます。武芸はありがたいことに，となりあわせの国でありまして，分不相応にも諸蕃民を支配しており，旧高句麗の土地を回復し，扶余の古い風俗を保っています。しかしながら〔日本とは〕はるかに遠くへだたり，そのあいだには海や河がひろびろとひろがっているため，音信は通ぜず慶弔を問う由もありませんでした。〔今後〕相互に親しみ助け合って，〔日本と高句麗の友好的な〕歴史に叶うようにしたいと願いますし，使者を通はし仲のよい隣国としての交わりを結ぶことを今日から始めたいと思います。そこで謹んで寧遠將軍郎將の高仁義，遊將軍果毅都尉の徳周，別將の舍航ら二十四人を派遣して書状を進め，あわせて貂の皮三百枚を持たせてお送り申し上げます。土地の産物はつまらぬ物ですが献上して〔私の〕誠意を示します。皮革は珍しいものではありませんので，かえって失笑を買って責められることを恥じ恐れます。自分の使者〔が伝えられること〕には限りがあり，〔このたびの使だけで，私の〕誠意が十分にうちあけられるとは思いません。機会あるごとに音信を継続して永く隣国としての手厚い交わりを結びたいと思います。そこで〔天皇は〕高齊徳ら八人に正六位上を授け，位階に応じた服装を賜わり，五位以上の官人と高齊徳らを宴会に招き，射術

の大会と雅楽寮の〔楽人が奏する〕音楽でもてなした。宴が終了し、身分に応じて禄が与えられた。二月壬午（十六日）従六位下の引田朝臣虫麻呂を、渤海使を送る使者に定めた。四月壬午（十六日）〔天皇は〕高齊徳ら八人に〔使者の労をねぎらい〕各々色どりのある絹布や綾、真綿を身分に応じて賜わった。また渤海郡王に書状を賜わって〔つぎのように〕いった。天皇は敬んで渤海郡王にたずねる。〔朕は王の〕書状を読んで、〔王が〕旧〔高句麗の〕領土を恢復し〔日本との〕昔時のごとき修好を望んでいることを具に知った。朕はこれを悦ぶものである。〔王は〕君臣の道に従い仁慈の心をもって国内を監督し撫育し、我が国とは遠く海を隔てゝいても、〔今後も〕往来を断たぬよう努めるべきである。そこで〔朕は〕首領の高齊徳らが帰国のついでに、〔朕の〕書状と賜物として綵帛十疋・綾十疋・絶二十疋・〔絹〕糸百紵・真綿二百屯を託すものである。このため〔一行を〕送り届ける使者を任命し、それを遣わして帰郷させる。〔夏に入って気候は〕漸く暑くなってきたが、想うに〔王の身边は〕平安・順調であろう。六月庚午（五日）渤海の使節を送って行く使者らが〔天皇に〕暇乞いをした。壬申（七日）〔渤海の使節を送って行く船の〕水手（水夫）以上、全部で六十二人に、身分に応じて位階を授けた。元号が天平と変った。天平二年（730）八月辛亥（二十九日）遣渤海使・正六位上の引田朝臣虫麻呂らが帰朝した。九月癸丑（二日）天皇が中宮に出御した。〔帰朝した〕引田朝臣虫麻呂らが渤海郡王の進物を献上した。丙子（二十五日）使者を派遣して渤海郡王の進物を六カ所の山陵に献上し、あわせて故太政大臣藤原朝臣不比等の墓を祭祀させた。冬十月庚戌（二十九日）使者を国々の名神の神社に派遣して、渤海からの進物を分ち奉った。最初の両者の通交はこの條でようやく終りとなっている。高句麗の滅亡は、乾封三年（668）九月、司空英国公勣、高麗を破ると「旧唐書」高宗本紀に記されて居り、日本書紀天智七年（668）十月の条に「大唐の大將軍英公、高麗を打ち滅ぼす」とある。天平十一年（739）秋七月癸卯（十三日）渤海使の副使・雲麾將軍（唐制を模した渤海の官職、唐制では武散官の従五品）の己珍蒙らが来朝してきた。第二回目来航である。これについても少しく引用を続ける。九月庚寅朔に日蝕があったのであるが、冬十月丙戌（二十七日）入唐使の判官・外従五位下の平郡朝臣広成と渤海からの客たちが入京した。十一月辛卯（三日）平郡朝臣広成が朝廷を拝した。広成ははじめ天平五年に大使の多治比真人広成に随って入唐した。六年十月に使命をおえて帰国するとき、四つの船同〔時〕に蘇州を出発し、海にのり入れた。〔ところが〕悪風が突然におこり、〔四隻の船は漂流して〕それぞれ見失ってしまった。〔平郡〕広成の〔乗った〕船の百十五人は崑崙国に漂着した。そこに賊兵が来て、包囲し、ついにとりこにされてしまった。船員は殺される者もあり、逃亡する者もあり、

残った者のうち、九十人余りは南方の土地の悪い病にかかり死亡した。広成ら四人だけがようやく死を免れ、崑崙王に謁見することができた。それでどうにかわずかな食糧を与えられ、よくない場所に置かれた。〔天平〕七年になり、唐国欽州の〔唐に〕帰順した崑崙人がその地にやってきた。そこで〔彼らに〕こっそり〔助け出されて〕船に載せられ、脱出してようやく唐国に帰ってきた。そうして日本の留学生の阿倍仲満に逢い、そのとりなしで上奏して〔唐の〕朝廷に参入することができ、渤海〔経由〕の路を取って日本に帰ることを請願した。天子はこれを許可し、船と食糧を支給して、出発させた。十一年三月に登州より海に出て、五月に渤海の境域に到着した。たまたま、渤海王大欽茂が使を派遣し、我が朝廷をおとずれようとしていたので、すぐにその使節に同行して出発した。荒れた海を渡る途中で、渤海の船の一隻が波にのまれて転覆し、大使の胥要徳ら四十人がおぼれて死んだ。広成は残りの衆を率いて出羽国に到着した。というのである。阿倍仲満とは、養老元年（717）、日本根子高瑞浄足姫天皇（元正天皇）の三年目の年に、靈龜二年八月癸亥（二十日）に組織編成された遣唐使、従四位下の多治比真人県守を遣唐押使とし、従五位上の阿倍朝臣安麻呂を大使に、この人事は九月丙子（四日）になり従五位下の大伴宿禰山守に代る、正六位下の藤原朝臣馬養を副使とし大判官を一人、少判官二人、大録事二人、少録事二人として組んだ、に同行した留学生の阿倍仲麻呂である。学成って唐朝に仕えたのち、遣唐大使藤原清河らと天平勝宝五年（753）帰国しようとしたが成らず、宝龜元年（770）に在唐五十四年で没したのである。広成の渤海経由での帰国を許したのは、時の唐の皇帝・玄宗皇帝である。この広成の入唐時の大使多治比真人広成らは天平六年（734）十一月丁丑（二十日）に多禰島（種子島）に帰着し、天平七年三月丙寅（十日）に唐国から帰ったと節刀を返上している。辛巳（二十五日）にはその遣唐使の一行とは云え広成らの百十五人を除いたものたちが天皇に拝謁している。さて、もとに話をもどして、天平十一年十二月戊辰（十日）その渤海使の己珍蒙らが朝廷を拝し、王からの手紙と土産物とを献上している。その手紙の文を引用すると、欽茂が申しあげます。〔渤海と日本の間は〕山河がはるかに隔絶し、国土はとおくはなれています。たたずんで〔日本の天皇の〕気高い人がらや民をみちびくはかりごとを望みますと、仰ぎみて〔尊敬の念が〕増すばかりです。慎んで思いますのに、天皇のとおといお考えやこの上ない徳はとおくまでひろがり、代々立派な君王があらわれて、その恩沢はすべての国民に及んでいます。欽茂はありがたいことに、先祖以来の業をついで〔渤海国を治めています〕、国を治めていることは、始めと変わりません。義は国内にいきわたり、なさは深く、つねに隣国と友好の関係を保っています。いま日本の使者の〔平群・平郡と同じ〕広業〔広成に同じ〕ら

森田 豊

が、風や潮の状態がわるく、漂流没落して、渤海国に来ました。〔そこで〕つねに丁重にもてなして、来春を待って帰国させようと思いましたが、使〔の広成ら〕は前に進むことだけを欲し、今年中に帰国したいと強く望み請います。〔彼らの〕訴えの言葉ははなはだ重く、隣国との義理は軽くはありません。よって旅行に必要な品を準備し、すぐさま出発させることとし、そこで若忽州都督の胥要徳らを指名して使とし、広業らを引きつれて日本に送らせました。あわせて、虎の皮と熊の皮をそれぞれ七張、豹の皮を六張、人参を三十斤、蜂蜜三斛をつけて進上いたします。日本の国に到着したならば、調べておさめていたゞきたい。己卯（二十一日）外従五位下の平郡朝臣広成に正五位上を授けた。そのほか水手以上〔の帰国した遣唐使たち〕にもまたそれぞれの等級にあわせて〔位を授けた。とくに〕正六位上の禰仁傑には外従五位下を授けた。とある。十二年（740）春正月戊子朔に天皇の大極殿での朝賀を受ける席に渤海郡使と新羅の学語も列したことが記されており、甲午（七日）には、渤海郡の副使・雲麾將軍の己珍蒙らに、地位に応じて位を授けて、すぐに朝堂で宴を賜わった。〔また〕渤海郡王に美濃特産の紵を三十疋、絹を三十疋、絹糸を百五十絢、調として貢上された真綿を三百屯、また己珍蒙に美濃特産の紵を二十疋、絹を十疋、絹糸を五十絢、調として貢上された真綿二百屯を賜わった。他の人びとにも地位に応じて賜わった。庚子（十三日）外従五位下の大伴宿禰犬養を遣渤海大使に任じた。この大伴宿禰犬養は同日に正六位上から外従五位下が授けられたものである。この2回の交流に始まる渤海国、高句麗の後裔である古代王国しかも698年から926年頃までの約230年程存在した幻の王国との友好関係とそれにまつわる人物につき小考したいと考えるものである。その間の日本に於ける天皇は文武天皇から始まり、元明、元正、聖武、孝謙、淳仁、称徳、光仁、桓武、平城、嵯峨、淳和、仁明、文徳、清和、陽成、宇多、醍醐までの17代である。それに、昭和、今上以後何代も続くものが、城西大学と中国吉林省・延辺朝鮮民族自治区の延辺医学院とで新しくつけ加えられんとしているからである。延辺医学院は吉林省延吉にあり、往時東京竜原府と称した渤海国の都の一つが極く近い琿春の地に在ったこと、延吉に城山山城が残り渤海の香りを有していること更には高句麗の国威発展を大いになした広開土王の碑がその自治区内集安に建ち残っていることなどが本文を綴らせる元となった。さらに、我が城西大学は高麗川のほとり、高麗神社に近い所に学舎を開き、未来の英傑を育てんとしている。この機に古く高句麗・渤海との交流を少しくふりかえり、如何に彼地に学んだかを、導かれたかを知り、今日の交流の資としたいと思うからである。中山久四郎序、五十嵐力校閲の「高麗神社と高麗郷」から少し引用すると、武蔵野の盡くる所、秩父嶺の漸く崎々あたり高麗入間の二流に沿い日高町（舊

高麗村高麗川村、現在は日高市となっている)を中心に、東西三十軒、南北十軒に亘る村々、これが奈良朝の昔、靈龜年間に一千七百九十九人を移して安住の地たらしめた舊の高麗郡である。日高町(舊高麗村)の西北隅、大字新堀字大宮の中央に、謂はゆる御殿の後山を背景として、高麗川の清流に臨んだ景勝の地に鎮座まします御宮がある。高麗神社と號ふ。齋かるる神々は、高麗王若光、猿田彦命、武内宿彌の三柱であるが、高麗王若光の卒するや従い來れる貴賤相集って尊骸を城外に葬り、神国の例に従い靈廟を御殿の後山に建い高麗明神と崇め郡中に凶事あれば則ち之を祈ると高麗氏系図に見られることより、はじめは若光一柱を祀ったものであるとする。この祭神たる高麗王若光とは如何なる事歴の御人か、又如何にしてかくも隔絶した海東の地に移り住まれたか、之を思うと興亡の歴史はうたゝ後人をして涙なきを得ざらしめる。と述べている。日本書紀卷第十応神天皇(誉田天皇)の七年(276)秋九月に、高麗人・百濟人・任那人・新羅人等が來朝した。武内宿禰に命ぜられ、諸々の韓人らを率いて池を造らせられた。そこでその地を韓人池という(日本書紀・全現代語訳・宇治各孟・講談社学術文庫1988)の條に初めて高麗(高句麗)の名が見える。二十八年(297)秋九月、高麗の王が使の文に「高麗の王、日本国に教う」と記したことにより困難を伴いながらの国と国との交流が開始されたと考えられるのである。続日本紀にもどって天之真宗豊祖父天皇(文武天皇)大宝三年(703)夏四月癸巳(二日)〔持統〕太上天皇のために百カ日の齋会を御在所で設けた二日あと乙未(四日)に従五位下の高麗の若光に王という姓を賜ったとある。それから13年ののち、靈龜二年(716)日本根子高瑞淨足姫天皇(元正天皇)の代の五月辛卯(十六日)駿河、甲斐、相模、上総、下総、常陸、下野の七国の高句麗人千七百九十九人を武蔵国に遷し、はじめて高麗郡を置いたとあり、この郡が今に残る高麗神社を中心とする郷である。この郡の創設の翌年養老元年(717)十一月甲辰(八日)高句麗、百濟二国の士卒は、本国の戦乱にあって、天皇の徳化に帰服した。朝廷はその〔本国が〕遠い異国であることを憐んで、租税負担を終身免除したとあり亡国の民に大きな配慮をしたことを示している。第一回の渤海使が日本(出羽国)に來着したのがそれから10年を数える727年であったことは既にこの小文の冒頭に述べたが、その使者らが入京した十二月丁亥(二十日)に正六位上の背奈公行文に従五位下を授けたとの記載が見える。この背奈行文については懷風藻に従五位下大学助背奈王行文二首(羊六十二)、五言。秋日於長王宅宴新羅客一首(賦得風字)嘉賓韻小雅。設席嘉大同。鑿流開筆海。攀桂登談叢。盃酒皆有月。歌聲共逐風。何事專對士、幸用李陵弓。五言。上巳稷飲應詔 皇慈被萬國。帝道沾羣生。竹葉稷庭滿。桃花曲浦輕。雲浮天裏麗。樹茂苑中榮。自顧試庸短。何能繼叡情。の二首があり、又萬葉集に 奈

良山の兎手柏の両面に左にも右にも倭人の友というのがあり右歌一首は博士背奈公行文大夫が詠めるとあると「高麗神社と高麗郷」に記されている。桓武天皇・延暦八年（789）冬十月乙酉（十七日）に行文に関して人物の記載があり、しかも非常に興味深い人物であるものが見られる。曰く、散位・従三位の高倉朝臣福信が薨じた。福信は武蔵国高麗郡の人である。本姓は背奈という。その祖父福德は、唐の將軍李勣が〔綏章元年（668）に高句麗の〕平壤城を攻め落とし〔高句麗が滅亡し〕たとき、我が国に渡来して帰化し、武蔵〔国〕に居住した。福信はこの福德の孫である。少年のとき、伯父の背奈行文に随って都（平城京）に入った。その頃、同じ年ごろの仲間といっしょに夕方石上衢に出かけ、遊び戯れて相撲を取ったが、〔福信〕は巧みに自分の力を使って敵に勝った。〔その評判が〕遂に内裏にまで聞こえて、召されて内豎所に仕えた。これ以降、〔福信の〕名が広く知られた。最初は石衛士大志に任じられ、しばらくして天平年中に外従五位下を授けられ、春宮亮に任じられた。聖武天皇は〔福信を〕を大変寵愛した。〔天平〕勝宝の初め、従四位・紫微少弼〔の地位〕に至った。〔その後〕本姓〔の背奈〕を改め高麗朝臣〔の氏姓〕を賜わり、信部（中努）大輔に転任した。〔天平〕神護元年（765）には従三位を授けられ、造宮卿に任じられて武蔵・近江の守を兼ねた。宝龜十年（779）、〔福信は天皇に〕書を奉って〔つぎのように〕述べた。私が偉大な天皇のもとにお仕えしてから、年月がかなりたちました。たゞ、新しく〔賜わった〕榮ある朝臣の姓は、分に過ぎたものですが、古くからの習わしとして使っている高麗の号は、まだ除かれないうです。高麗を高倉に攻められるよう謹んでお願いいたしますと。〔天皇は〕詔してこれを許した。天応元年（781）に弾正尹に遷り武蔵守を兼任したが、延暦四年（785）には〔天皇に〕上表して辞職を願い出〔許されて〕散位となって〔官界を退き〕家に帰った。薨じた時、八十一歳であった。とある。この福信には石麻呂という子供があり、宝龜四年（773）二月壬申（二十七日）にその人物の記載があり、曰く、当初造宮卿・従三位高麗朝臣福信を、楊梅宮の造宮に専ら当たらせていたが、ここに至って〔楊梅〕宮が完成した。その〔高麗福信〕子息の石麻呂に従五位下を授けた。この日、天皇は楊梅宮に居を移した。とある。この高麗福信の一族と高麗王若光の一族とは高句麗の出自であることに違いはないが、同族ではない。これら高句麗族との交渉を今少し紀にもどり尋ねて見ると、先の応神天皇二十八年（297）秋の時の太子菟道稚郎子に破り捨てられた上表文のトラブルのあと、國交の修復は本邦側から機会を持った。即ち、三十七年春二月一日縫工女を求めて、阿知使主、都加使主を呉に遣わす予定で高麗国經由をとったが道を探し得ず、高麗国の王は久礼波、久礼志の二名を道案内として差出して呉行きを助け、呉から縫女として兄媛、弟媛、呉織、穴織の四人を

得させることに協力をしたことが述べられている。この阿知使主らが呉から筑紫につき、宗像大神の求めに応じて兄媛を奉り、いまの筑紫の御使君の先祖となしたが、他は津の国に至り、武庫についたとき四十一年春二月十五日、応神天皇は崩御された後であった。縫工女たちは大鷦鷯尊に奉られたがこの子孫が呉衣縫、蚊屋衣縫たちである。大鷦鷯尊は即位して仁徳天皇と称されたがこの年313年であった。仁徳天皇十二年秋七月三日、高麗國が鉄の盾、鉄の的を奉ったとあり、この盾・的ともに多くの人が射通す事が出来なかったが、的臣の先祖の盾人宿禰が的を射通した事が八月十日條に見える。五十八年冬十月、四十六年を経て高麗國が通貢した。顕宗天皇三年（487）、紀生磐宿禰が任那高麗へ行き通い自ら神聖と名乗り百済との戦いにも向う所敵なしの勢いを示したが、その道化の力も尽き失敗となる一事件を挟んで、仁賢天皇六年（493）秋九月四日日鷹吉士を高麗に送り巧手者を求め、工匠順流枳・奴流枳ら倭国山辺郡額田邑の皮工高麗の祖先を同道帰国した。これら多くの工人を彼地に求めた事例を見ても如何に彼地が先進の技術を有し、本邦がそれに教えを受けていたかという受益交流の様が見てとれるのである。当時の高麗は、松花江の上流扶余の地に東明聖王高朱蒙を建国の祖とするもので、後の王建を祖とする新羅滅亡後の半島にあった高麗とは全然別個のものであり、晋人をして「東国文字無し、高句麗独り之を有す」と云わしめた東方文化の国である。この高句麗は先に云った広開土王（好太王）の時國勢最も振い、大いに國土を開拓し、遂に南下して朝鮮の北半を平定した。次いで其の子長寿王は都を平壤に遷した。盛時に於ける版図は、現今の忠北江原兩道以北瀋陽長春のあたりから、遼河以東の遼東半島一帯、東はウラジオストックに迄及んで北方の強国として隋唐の勢威にも屈せず、終には一戦して隋の煬帝を破り、再戦して唐の太宗に勝ち、太宗をして「魏徵若し在らば我れをして此の行あらしめざりけん」と悔恨せしめた程であると「高麗神社と高麗郷」に書く通りである。欽明天皇二十三年春一月（562）任那は亡んだ年の八月、大將軍大伴連狹手彦が使され数万の兵をもって高麗を破り、珍宝、七織帳、鉄屋を持ち帰り、その七織帳を天皇に奉ったとあり、又ある本には狹手彦は高麗王陽香を比津留都に追い退けたのが十一年であるとも伝えられている。であるが、二十六年夏には、五月、高麗人頭霧唎耶陞らが来航、山背国に配され、畝原、奈羅、山村の高麗人の祖となつたとされる。三十一年夏四月越の人江淳臣裾代が京に奏上して高麗使人の難破漂着と郡司の調の着服を伝えたのに対し、山城国相楽に館を建ててもてなしたという事が記され、又再び良好な交流関係の継続の様子が知られる。次の敏達天皇・淳中倉太珠敷天皇の元年五月に鳥羽の表で知られる船史の祖王辰爾が先の高麗からの使者に関係してクローズアップされた。即ち、天皇は高麗の国書をとって大臣に授け、多くの史に解説を

命ぜられたのである。このとき史たちは三日かゝっても誰も読むことが出来ずにいた。王辰爾は鳥の羽に書かれてあった文字を、羽を炊飯の湯気で蒸して帛に羽を押しつけ文字を写しとりそれを解読した。このことで東西の史の面目は失なわれた。この回の使節はなおも問題を起したのであるが、内輪での責任問題から、大使が副使に殺害されるという事件を起したが秋に帰って行った。続く二年夏の高麗からの使節に対する吉備海部直難波の行為に対して疑いがもたれ、朝廷の雑用に使役されていたところ、三年夏の使節からの先の使節の安否を尋ねたことに対し、難波の罪を責めて刑罰に処すという不祥事も交流の添え物として見られる。仏教を日本の地に定着させたのも高麗人の力であると云える。曰く、敏達天皇十三年秋九月、百済から来た鹿深臣が弥勒菩薩の石像一体をもたらした。佐伯連も仏像一体をもってきた。この年蘇我馬子宿彌は、その仏像二体を請うけ、鞍作村主司馬達等と池辺直水田を四方に遣わして、修行者を探させた。播磨國にて僧で還俗した高麗人の恵使という人があり、馬子大臣はその人を仏法の師とした。馬子はひとり仏法に帰依し、司馬達等の女の善信尼、漢人夜菩の女の禅藏尼、もう一人の錦織壺の女の恵善尼の三人の尼をあがめ尊んだとあり、仏法の広まりはここから始まったと云われ、高句麗人の力の依って大なるものがあつたのである。推古天皇、豊御食炊屋姫天皇の元年（593）四月に厩戸豊聡耳皇子を皇太子とされたが、この太子、聖徳太子の仏法の師も又高麗の僧、慧慈であり、百済僧慧聡と共に仏教の興隆に力したことは知られている所である。推古天皇十三年（605）、鞍作鳥を造工の工として、はじめて銅と繡との一丈六尺の仏像を各一軀造ることとした。そのとき高麗國の王、大興王が黄金三百両をもって仏像建立に寄与を行なったとある。この丈六の仏像は十四年夏に完成したが、この仏像は収められる御寺、元興寺（飛鳥寺）の金堂の戸より高く、堂の中に入れることが出来ないという難題が持ち上がった。多くの工人たちは相談して、堂の戸をこわして入れるべしとした。鞍作鳥はこのとき工夫をこらし戸を壊さず立派に仏像を堂内に収めたとされる。この日齊会を設けたと伝えられるが、この年から、丁度この日が四月八日であったことから、四月八日・灌仏会、そして七月十五日・盂蘭盆会に齊会をすることと定められたというのである。又五月五日に推古天皇は鳥に対し「自分は仏教を興隆させたいと思い、寺院を建立しようとしてまず仏舎利を求めた。そのときおまえの祖父の司馬達等が即座に仏舎利を献上してくれた。また国内に僧尼がなかったとき、おまえの父多須奈が用明天皇のめたに出家して仏教を信じ敬った。またおまえの姨の嶋女は出家して、他の尼の導師として、仏道を修行させた。今自分が丈六の仏を造るために、良い仏像を求めたとき、汝のたてまつった仏の図は、わが心に適ったものであつた。仏像が完成し、堂に入れるのが難しく、多くの工人は

戸をこわして入れようかというとき、おまえはよく戸をこわさず入れることができた。これはみなおまえの手柄である」と称めた上、大仁の位を賜った。大仁とは、先々年の十一年十二月に定めた冠位十二階、即ち、大徳、小徳、大仁、小仁、大礼、小礼、大信、小信、大義、小義、大智、小智の内第三位であるが、冠位により階ごとにそれぞれきまった色の紵を縫いつけ、髪は頂きにまとめてくくり、袋のように包んで縁飾りをつけ、元日だけは髻花（髪飾）を挿すとしたものであった。このとき鳥は近江國坂田郡の水田二十町も賜ったが、この田を財源に天皇のために金剛寺を造ったのであるが、それが南瀨の坂田尼寺であるといわれる。鳥の父、鞍部多須奈は用明天皇の二年（587）、天皇が痘瘡にかゝられ、いよいよ重くなり、亡くなられようとするときに、私は天皇のおんために出家して修道いたします。また丈六の仏と寺をお造りいたしましう、と奏上したとされている。このときの丈六の仏像とは、坂田尼寺（坂田寺）にある木造の丈六の仏、脇侍の菩薩がそれであるといわれている。十五年（607）秋七月三日、大礼小野妹子を大唐（隋）に遣わしたとあり、先に渤海使に同行された広成らの遣唐使の始まりがこのときにある。この妹子は十六年夏四月に帰朝するのであるが、唐からの使人裴世清らが同行したが、その客人たちのために新しい館を難波の高麗館の近くに造ったとある。このときすでに多くの高麗からの人使が来航し、そのための館があったことを示している。同年九月、妹子は大使として再び唐へ遣されるが、十七年九月に帰朝する。翌十八年春三月、高麗王が僧曇徴、法定らをたてまつったとある。曇徴は五経に通じており、絵具、紙、墨などを作り、水力を用いる臼をも造った。水臼を作ったのはこれが最初であるとされる。1949年1月に焼失した法隆寺壁画を描いたこの僧は種々の技術に長じており、わが國古代文化の重要な発展の基礎技術の一端を指導した一人である。紙作りの技術は古く漢代に蔡倫がその技法を確立したとされているが、日本に伝えたのはこの曇徴である。この高麗の郷の近在に小川町・現在の和紙の里があるのも因縁である。又我々が劇場或いは式典で舞台に垂れ下がる緞帳を見るが、これはこの曇徴に因んだ名であると云われている。彼の工夫した水臼は近代までその効用ははかり知れない程大きなものであったことは論を俟たない。如何に我邦は彼地の進歩した文明の恩恵に浴したか、枚挙にいとまがない。数を数えるに、本考の主題である渤海との交流は、遣渤海使13回、彼地よりの使節は35回（内1回は東丹國とってからのも）、当時の半島にあって威をふるった新羅とのその数は遣新羅使は24回、彼地からのそれは47回であり、これを唐（隋）との交流の回数、遣唐使14回と彼地からの使節9回に比し如何に多いかということが判る。その分だけの影響力の差はあると考えられる。本考はこれからの機会を得て、それらを紹介する役を果したいと考えるもの

森 田 豊

である。筆者は薬学にあって生薬学を専攻するものである。前述の通り、渤海よりの使者が持ち来たる物品の内、人参、蜂蜜などの薬物があり、未だ述べない交流回の交換産物中には興味深い生薬の交流がある。又関係人物の内、福信は東大寺献物帳、即ち古代中国交易品の内正倉院に収められた種々物品、聖武天皇ゆかりの品々を記すもの、にその名をとどめる人物でありその面でも更に深くその事蹟を述べたく考える対象である。渤海・高句麗との交流を渤海滅亡の年迄の間種々のエピソードを拾い、紀要の刊行にあわせて綴りたいと思っている。本小考はその序論としたい。

(1994. 11. 10)